ハーレム去勢リンチ

戒律でセックス代わりに

去勢をする女性たちの国に出張した男の悲劇！
最後は美女軍人たちによる
去勢行進でキ〇タマ踏み潰し！

玉子王子　著

１章　外国について即逆ナン！　しかし相手の女性は好意百パーセントでキ〇タマを潰しに来る

　飛行機を降りる人々。

　その中に土江工太がいた。

　急な出張を命じられ、土江は慌てて飛行機に飛び乗るような形でその国にやってきた。

「準備も無しじゃ何も出来ないだろ……」

　呟きつつ、空を見上げる。

　ウッサーラ共和国。

　鎖国していて、あまり外との関係がない

　しかし商売のためなら、多少は交流も許される。

　土江の会社はドラン・モーター社、その名の通り自動車の会社だ。

　ウッサーラに工場を置いて現地で作った車を売りたいということだが、会社が本気なのか土江は疑っていた。

　日本で作った車を売るための支社すらないのだ。

　出張所があるだけである。

　そこにいきなり工場は無茶だ。

　が、社長の竜造寺は思いつくとすぐに実行したがる男だった。

　噂では、メイドロボの開発に金を出しているという。

　そういう人間からすれば、工場一つ二つ、建てようと思えば交渉に社員を送るのは当然かもしれない。

　ウッサーラはヨーロッパの国で、英語が話せればなんとでもなる。

　ただ、土江は話せないので、頭に翻訳用のチップを埋め込んだ。

　睾丸が潰れても十秒で治せるナノマシンがある時代だ、そのぐらいのものがあっても不思議ではない。

　ともかく、そもそもあまり情報がない国で、いきなり行けといわれたので言葉だけ通じるようにしてとにかく現地に飛ぶ、という無茶苦茶な形で空港に降り立った。

　日本人が珍しいのか、空港職員やそれほどいない客の女性たちが注目してきた。

　と、空港の出口で足を止める。

　自分のポスターが張られていたのだ。

　いや、違う。

　よく見ると、年上の男。

　数年前に亡命したという、前大統領だ。

　土江は、彼が自分にそっくりだったということを思いだす。

　今はその娘が大統領を継いでいるという。

　――ていうか、世襲なのかよ。

世襲というより、前大統領の人気のお陰なのかもしれない。

亡命など裏切りと思えるが、まだポスターが空港前に張られているのだ。

タクシー乗り場に行く。

そこでも、珍しいのか女性たちが見てくる。

――女ばっかりだな。

不思議に思う。

タクシーの運転手も女性。

「ど、どちらまで？」

顔を赤らめて聞いて来る。

その反応で、唐突に思い出す。

数年前、ウッサーラの大統領がアメリカに亡命して日本でも話題になった。

少ない情報ながら、大統領についての話が報道されていた。

その一つに、彼の顔の話があった。

大統領は土江そっくりで、周りの者たちは土江が亡命したと大笑いだった。

親や妹にまで受けるのだから救いがない。

が、ネタはそこで終わらなかった。

なんと、大統領はこのウッサーラでは**魔性**といわれるほどの美貌だというのだ。

美的感覚は国によって違うという話。

妹などそれを聞いた時、呼吸困難を起こしかけるほど大笑いした。

「お兄もウッサーラに亡命したらクッソもてるんじゃないの？」

なぜ亡命する必要があるのかわからないが、まあ鎖国している国に普通に移住するのは難しいというのはある。

――そうか、魔性の大統領と似ている俺はこの国じゃ超絶イケメンなんだ……だから職員の人たちや、その辺の女性が見てくれるんだな。うーん、マジでモテる予感。

土江は三十歳。

女性経験のほとんどは風俗というモテない男だった。

まあ一様素人童貞ではないのだから、最悪ではない。

最悪ではないが、平均以下ではある。

それが、河岸を替えただけで突如超絶イケメン。

何か起こるかも、と期待するなという方が無理だろう。

宿泊先の高級ホテルの名前を告げ、しばらく何も考えずタクシーに乗る。

会社からのメールも一様チェックする。

「ん、工場は……現地のを適当に買収しろだと！？　桃〇郎電鉄じゃねえぞ、何考えて生きてんだあいつら」

やる気がない。

だが、社長の手前がんばってる格好だけは見せねばならない。

あほらしい話だ。

それに付き合わされる下っ端は辛い。

いや、辛くない。
つい、にやけてしまう。
――だって俺、ここでは超絶イケメンだから。
いい思い出来るかもしれない。
そう思うと、宮仕えも悪くない気がする。
タクシーが止まる。
「お客さん、着きましたよ」
「そう、いくら？」
「今日はおまけしておきます」
頬が引きつる。
が、一瞬後笑みがこぼれる。
「それって、俺がかっこいいから？」
「やだ……そんな……荷物持ちますよ」
大してもっているわけではない。
女性にもたせるというのも悪いが、運転手はすぐに車から降りてしまう。
「いや、もてるって」
――俺が言うと「女に」って意味になるな、この国だと！
ヘラヘラしつつ、何かに躓く。
別に何もない。
道が割れているだけだ。
「うわ、酷いな……」
いいつつ、周りを見る。
表面のコンクリートがひび割れまくったビル。
窓は割れ、扉も壊れ、スクラップの車がその辺に何台も放置されている。
どう見てもスラムだ。
「おいおい、ここに高級ホテルがあるのか？」
見回すが、そんなものはない。
「お姉さんここは……あ」
目の前に立っていた女性運転手。
それが、胸元を開ける。
二十少しで、かなりボリュームある胸元。
顔も悪くない、というか、かなり綺麗なほうだろう。
そういえば、空港職員も美人ばかりだったことを思い出す。
途中ですれ違った女たちもだ。
――美人が多い国か、いいなあ。しかも、この国で俺が超絶イケメンという都合がいい話。
「お兄さん、そのボロビル、ホテルもやってるんだ。ちょっと休憩して行かない？」
「うーん、まあいいかな」

モテたためしがないので、女の誘いは断りがたかった。
相当危なそうだが、別に運転手に悪意はない。
スラム街といっても、貧しいだけで治安が悪いわけでもないのだ。
ちら、と見回した限り、座り込んでいるのも、歩いているのも、女性ばかりだ。
――本当に女が多いな……というより……
男をまったく見ない。
不思議に思いつつも、ボロビルに入る。
「はいいらっしゃ……あらあ、いい男」
「ふふ、そうでしょ？　外国の人よ。えーっと」
「日本人で」
「あら、それじゃ、侍、芸者、それに……」
「ドラ〇もん」
「そう！　ドラドラドラドラ裁くのは！」
「全然違うんじゃないか？」
タクシー運転手が目を輝かせているのに、悪いと思いながら突っ込む。
と、その受付も女性で、三十ぐらいの美人だ。
――女で綺麗な奴しかいないのかこの町は？　嬉しいといえば嬉しいが……
「でも、ほんとにいい男ねえ」
「うふふ」
す、と寄り添う美人運転手。
手が股間に触れる。
「あっ」
「ボリュームもあるよ」
「日本人変態だからそこがでっかいって本当なのね」
――それ本人の前で言うか！？
大きい、というのはまあ褒めているが、理由が「変態だから」では微妙というしかない。
「っていうか、何で変態って」
「ウッサーラで流通してるエッチ漫画が全部日本製なのよ」
「国産のはないのかよ」
いいつつ、鍵を受け取って奥の部屋に行く。
「そうだ、俺は土江、あんた名前は？」
「クヤルだよ」
「クヤルも漫画とか読むの？」
「読むよ、日本の。好きなのはそうね……ガール〇フォームMかな」
「何だそりゃ……」
聞いた事もない。
M男子向けのエロ漫画雑誌である。

「いい漫画だよ、参考になるんだ」

何の参考か、聞くべきだったかもしれない。

しかし、外国に降り立ってすぐに逆ナンでホテルに直行というのは嬉しすぎて、余計なことは考えられなかった。

しかも、逆ナンの理由が「超絶イケメンだから」では。

――ああ、生きててよかった。

思えば、数ヶ月前地獄を見た。

――ひょんな事から周りの若い女全員が俺のキ〇タマを潰しに来たからな。あの時の苦しみは今も夢に見る。一人でも多く俺のあの苦しみを知って欲しい……だから**体験版を入れておこう**。

わけのわからないことを考えつつ、女がシャワーを浴びるのを待つ。

と、シャワー室から声。

「入ってこない？」

「うわあ、嬉しすぎる」

飛跳ねて向かう、服を脱ぎ捨て、入る。

もちろん、クヤルが全裸で待っていた。

巨大な乳房に、引き締まった腹、隠すこともない女の割れ目とそれを守る茂み。

そんな女が、顔がいいというだけで自分を待っている。

気が遠くなるほど嬉しく、一物があっという間に巨大化する。

「いらっしゃい……あらあ！　大きいわねえ！　どのぐらいあるの？」

ビンビンと反り返る巨大すぎるほどの土江の巨柱に目を見張るクヤル。

誇らしく思いながら、正直に答える。

「立って三十三センチだね」

「大きい！　いや、平均何センチとかは知らないけど……見れば圧倒的に大きいのはわかるわ。それに……うふふ、肝心な所も、でっかいわあ。本当に変態なのね」

「ん、まあ……」

――この子も変態とか普通にいってくるのね。っていうか、肝心って、キ〇タマの方が肝心なのか。

まあ、そう考えられないこともないかもしれない。

思いつつ、三十三センチのものを突きつける。

「うふ、もちろんわかってるわ」

握る。すでに泡をつけていた手、上下に動かす。

「おおっ」

「こんな大きいの、上手く出来るかしら」

「き、気持ちいいよ」

体を強張らせ、風呂の壁に背中をつける。

逃がすまいと追ってきて、手を止めないクヤル。

しゃがむ。尻の丸みが背中越しに見える、エロい。

ブルンブルンと揺れる巨乳を見下ろし、涎が出る土江。

――あ、ゴム忘れた。まあ外に出せばいいか。

「うふふ、タマタマ引きあがってきた」

「それじゃ、ちょっと放してもらって、今度はこっちの」

「えい」

　左手を引くクヤル。肘を引く。

　そして弧を描くように拳を振り上げる。

　メキ、肉が悲鳴を上げる。

　クヤルの拳が、土江の肉玉を押し潰した。

「おぐあああああああっ！」

　血の気が引き、一瞬後絶叫する土江。

　それを聞いて、顔を赤らめてアヘ顔を見せるクヤル。

「やだ、いい声！　もっと聞かせて！」

「ひぐっ！　お、ちょ、きん……ああっ！」

　ボスボスボスボス、アッパー。無防備に仁王立ちしていた土江の股間にクヤルの拳が減り込む。

「あはははは！　キ〇タマキ〇タマ！　さあ潰れなさい！　ほらほら、右玉集中攻撃よ！」

「ひっ、やめ、やめっ」
腰を引こうにも、下がろうにも、後ろは壁だ。
手コキの気持ちよさに下がれるだけ下がっていた。
その状態で、金袋に容赦なく女の小振りな拳が叩き込まれる。
それも、攻撃している様子はない。
クヤルの表情にあるのは、自慢パイズリでも見せているような興奮と喜びだ。
だが、やっていることは容赦のない去勢である。
「ひぐっ！」
唇を噛み、仰け反る土江。
「あはっ！　もしかして！」
涎を垂らすほど笑みを浮かべ、拳をそっと引く。
右玉は、拳の横に見えていた。
だが、左玉の姿がない。
メチャ、と土江の体の奥が鳴る。
離れた女の拳の下、肉袋の中に崩れた肉塊があるように見えた。
「やだああ！　左のタマタマが先に潰れちゃった！　半分去勢！」
「はんぐうううううっ！」
膝が崩れ、クヤルに倒れこむ土江。
「あらあら！　まだ片方残ってるでしょ！　おチ〇ポこんなに大きいんだから、がんばって！　っていうか、片金潰れても立ってるなんて凄いわ！　やっぱり変態！」
土江を優しく抱きとめ、風呂の床に下ろす。
ひんやりしたそれに、シャワーから湯をかけて温める。
きわめて優しい振る舞い。
しかし、今の今、土江の男の二つしかない重要な臓器を狙って殴り、潰した所なのだ。
いくら市販のナノテク薬で十秒で治るとしても、肉玉を潰すのは軽いことではない。
股間を押さえる土江だが、肉玉を片方潰された状態では力など入らない。
腕を引っ張られると、すぐに股間は無防備になる。
「おお、まだビンビン。大きいし、凄いわ」
「な、何で……」
「え？　何でって……どういうこと？　大人の男女ってこういうものでしょ？」
フェラしたら驚かれた、というような雰囲気で不思議そうな顔をするクヤル。
だが彼女がやったことはとても一般的な男女間で行われる行為ではないはずだ。
が、この国ではそれが普通だった。
この国の宗教では、セックスは子作りのときのみ。

それ以外のときは、代替行為を行うことと定められていた。

それは古くは金責め、女性による睾丸への暴力である。

ここ数十年では再生医療が発展し、ナノテクで睾丸再生が可能になると女性たちの代償行為は大きく進歩した。

いや、進歩といっていいのかはわからない。

この国の女性たちは、普通の女性がセックスする場面で、その相手の男の急所を潰し、去勢するようになったのだった。

それを心底愛情だと彼女たちは考えている。

それも、ただ去勢するのではなく、キ〇タマ責めの頃のように出来るだけ言葉責めなども駆使して苦しめるのが愛と考えられている。

もちろん、男たちはそれでは文字通りたまらない。

多くが外国に逃げ、今やこのウッサーラ共和国は男一人に対して女九十九人という男女比になってしまっていた。

これ以上男に逃げられてはまずいと、この国は鎖国を選択した。

さらに、男というだけで俗称「男手当て」を与え、働く必要もない状態で保護することとなった。

それでも、何とか逃げようとする男は後を立たない。

当然だろう。

セックスは戒律で拒まれて出来ない、その代わり女が肉玉を潰しに積極的に狙ってくる、では住んでいたい訳がない。

そう、この国の女は積極的なのだ。

そうでないと、数少ない男をゲットできないのだから当然だろう。

元々積極的。

まして、土江は魔性といわれたほどの美貌の大統領とそっくりの顔をしている。

彼はまだこの国に来たばかりで何も気づいていない。

だが、間もなく気づくだろう、自分は街を歩いているだけでもハーレムの主になれる立場にいると。

ただし、そのハーレムは主とのセックスの代わりに主への去勢が行われるのだが。

「ペ〇ス大きい！」

握り、上下に手を動かす。

「ひいい、や、やめ……おぐううあああ！」

反対の手を握って、巨竿の根元に叩きつける。

M字開脚で転がされ、手コキをされつつ肉玉に鉄槌を食らう。

足をばたつかせるが、すでに片金を潰された状態では力はない。

「や、やめ、一個だけは許して！　片方だけでも残してくれ……おぐおおおおおおおおおおっ！」

「やった！　去勢！　ううん、久しぶり……ああ、幸せ。ありがとう」

ビクビクと痙攣する巨柱から噴き出す血と粘液。巨柱の先端に口をつけ、それを啜るクヤル。

一方的に男性器を破壊して、一人の男から生殖能力を奪っておきながら、クヤルはお互い気持ちいいセックスを終えたような満たされた顔だった。

大量に出た粘液を飲みきってから、シャンプーなどの横に置いていたビンを取り、薬を一粒土江の口に入れる。

それはナノメカが入った薬で、十秒ほどで土江の睾丸を再生させる。

ただ、痛みは消えない。

「う、ぐうううう」

「大丈夫？　ありがとうね、素敵だったわ」

ざっとシャワーで汗を流してから肩を貸し、歩かせる。シャワーで濡れた体をある程度拭いてからベッドに寝かせる。

あまり綺麗なベッドではないが、贅沢はいえない。

裸で大の字に寝かされる土江。

手早く服を着るクヤル。

「それじゃ、私は仕事に戻るから」

「ま、まって……なんで……」

「うふ、女にそんなこと言わせないで。でも、あなたを喜ばせるために言うわ……あなたのおチンチ〇が大きかったからよ」

つかんで引っ張り、先端に口づけする。

「あらっ、もう、元気。大きいし、この元気さ……本当に変態なのね」

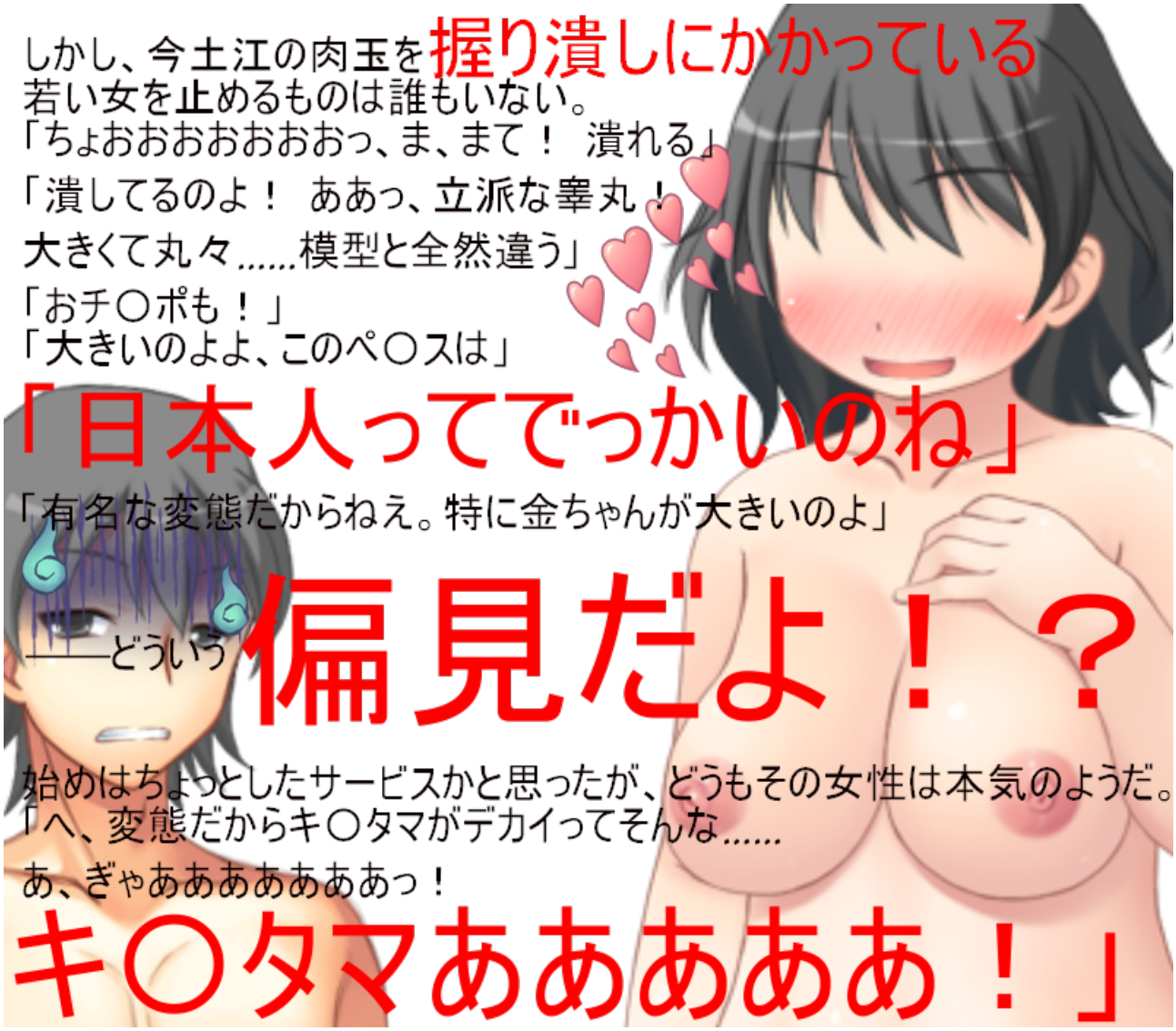
ビンビンに反り立った巨柱と、その下の肉玉を見つつ名残惜しそうな顔のクヤル。
だが、ずっといるわけにも行かない。
扉を開けると、前に受付の女性が立っていた。
それと、ベッドメークなど行う若い女性。
こちらもなかなかの美人だった。
さらに、その女性の友人が二人。
「クヤル、どうだった？」
無言でベッドを指差す。
「まあ、大きい！」
受付の美人が目を輝かせる。後ろの若い女性たちが身を乗り出しつつ、首をかしげる。
「そうなの？　学校で見た模型よりはかなり大きいけど」
「そうよ、あれ、普通の二倍……三倍かもね」
「うっそ、凄いわね」
「それじゃ、私はこれで」
に、と微笑んで去っていくクヤル。
男が少ないウッサーラでは、女は強引に行かねばならない。
男を保護する代わりに、恋愛のために多少女が強引なことをしても罰せられることはない。
この場合、恋愛と書いて去勢という意味であるのはいうまでもない。
そういう国なので、クヤルも四人の知り合いの女たちを邪魔するようなことはなかったのだ。
嬉々として、部屋に入る四人。
「ちょ、ちょうどいい所へ……今の女が……えっ」
ブルン。
受付の美人が巨乳を唐突に剥き出す。
「クヤルより大きいでしょ？」
さわ、と股間に優しく手をやる。
「ああいう若い子はがつがつして……多分おチ〇ポしごいてすぐタマタマ潰したでしょ？　私はもう少し楽しませてあげるよ」
「え、ちょ、ちょっとまって。あの子が俺のキ〇タマを潰したんで、警察に……」
「やだっ！　意味わからないわ！」
「えーーー？」
と、大股開きの足の間に、若い娘が座る。
膝で太股を押さえ、両手で弛んだ肉玉を握る。
「え、ちょ……おおおおおおおおおおおおおおお！」
「もう我慢できない！」
「そうよね！　だって私たち……おチンチ〇始めてみるんだもん！」
「まず、潰させて！　キ〇タマ潰させて！」
「私も！」

「まあ、しょうがないねえ……」

男でいえば、童貞だからとにかく一回入れさせてくれ、というようなことか。

いや、そんな無茶は通らないか。

しかし、今土江の肉玉を握り潰しにかかっている若い女を止めるものは誰もいない。



「ちょおおおおおおおっ、ま、まて！　潰れる」

「潰してるのよ！　ああっ、立派な睾丸！　大きくて丸々……模型と全然違う」

「おチ〇ポも！」

「大きいのよよ、このペ〇スは」

「日本人ってでっかいのね」

「有名な変態だからねえ。特に金ちゃんが大きいのよ」

——どういう偏見だよ！？

始めはちょっとしたサービスかと思ったが、どうもその女性は本気のようだ。

「へ、変態だからキ〇タマがデカイってそんな……あ、ぎゃあああああああっ！　キ〇タマあああああ！」

文句の途中で絶叫し、股間を跳ね上げる土江だが、受付と若い娘二人に上半身は押さえられ、下半

身は一人の娘に座り込むように押さえられて身動き取れない。

　その座り込んでいる娘が目を輝かせ、握り締めた肉袋を引っ張る。

「やったああ！　睾丸潰した！　左右二個とも！　男の大事な性器握り潰したよ！　ほら陰嚢見て！　空っぽだよ！」

「うふふ、これで特大変態チ〇ポも役立たずね。女の子に去勢されて悔しい？」

　ドクドクと命を噴き出す巨柱を握り、頬を緩める受付の女。

「次は私ね！　でも、ああ……ホントかっこいい。こんな人間いるなんて……」

　腕を押さえている若い娘。

　肉玉を潰され、白目を剥いて泡を吹く姿を見てうっとりする。

　まあ、表情は気にせず、元の顔を想像するのはそれほど難しくないだろう。

　その若者の言葉に、少し首をかしげる受付の美女。

「大統領そっくりよ。ホント、女として死にたくなるぐらい綺麗な顔だけど、いないわけじゃないでしょう」

「前に大統領が亡命した頃って私子供だったからよくわからないのよね」

　いいつつ、薬を飲ませる。

　そしてさっさと股間の娘と交代する。

　もちろん、がっついている娘は目が覚めた瞬間、土江の去勢を開始するつもりだ。

　セックスの代替行為であるから、ジットリ雌穴は湿っている。友人の去勢で十分興奮していた。

　自分がやったらどうなってしまうのか、と胸が高鳴らずにはいられない。

「早く目を覚まして……」

　袋の中に再び形成された肉玉をモミモミとしながら、搾り出すようにいう娘。

体験版終わり

この後、さらにどんどん女性が増える一方で、

土江の睾丸は潰され続けます。

ついには数え切れない女性軍人たちが

股間を踏み潰して行進していくというラストを迎えます。

続きは製品版で